

## 第一章

「ご主人様…ですよね？」

「へ…？」

森田柚（もりた・ゆず）は、遙か上から自分を見下ろす巨体の男を、顔を真っ青にしながら見上げていた。

（だ、誰、この人！…え、い、今、ご主人様って言った!?）

今すぐにでも逃げられるように少しでも腰を浮かした柚は、改めて目の前の男を見る。黒髪ベースに金のメッシュが入ったウルフカット、キリッと上がった眉と垂れ気味の青い瞳、彫りが深めのとんでもなく整った顔立ちに、褐色気味の肌と、とんでもなくデカイ身長。

「あ、あの…も、もしかして…」

柚がプルプルと震えながら尋ねると、男の口角が上がった。

「そうです…俺が…、あなたの奴隷犬です」

（そ、そんなあ…、ヒョロくてガリガリの私と同じような平凡男じゃないのお…!?）

柚はその場にへたり込みそうになるのを何とか堪えていた。

『…ご、ご主人様…、ご主人様の忠実な奴隷犬に、ご褒美をくださいませんか…?』

「…奴隷犬風情が生意気。舌出して無様に『へっへっ♡』って犬みたいにならんちんポーズしておねだりしなさい」

『ああ、ご、ご主人様…ぐう…!』

「…何勝手にイってるの。…罰として今日はもう終わり。じゃあね」

『あ、ご、ご主人様っ…!』

相手の返事を待たずに通話を切った柚は、ベッドに倒れ込んで、「はぁー」と満足げなため息を吐く。

「今日もいいストレス解消になったなあ…」

へラっと笑う柚に、先ほどの女王様然とした雰囲気は一切見当たらない。ドエムな男を虐める女王様の正体は、ショートカットの黒髪の平凡な30代女性だった。

「…それにしても、あんな怖いこと言われて喜ぶような人がいるなんて思わなかったなあ」

仕事着のスーツをぽいぽいと投げ捨てながら、柚は大きなあくびをしてお風呂場へと向かった。

全ての原因はストレスだ。

「森田さん、ごめんなさい。この資料、ちょっと分かりにくいの。作り直してもらえる？」

「…はあ」

（具体的な指示もなく、修正をお願いされたのこれで5回目なんですけど…）

柚がげんなりとした表情で言うと、目の前にいるゆるふわロング髪で、綺麗に化粧した西村課長は、瞳を潤ませ、周囲に聞こえるようにわざと少しだけ声を大きくする。

「ごめんなさい。この資料は取引先に提出するものだから、完璧なものにしたいだけなの。そんなに怖い顔をしないで。森田さんが大変なら私が引き受けるから」

少しだけ震える哀れそうな声。柚は自分の背中にたくさんの冷たい視線が突き刺さっているのを感じ、小さくため息を吐くと「いえ、自分でやり直す」と返して頭を下げた。そして、また冷たい視線を受け止めながら、自分の席に戻り、キュツと唇を噛んで、恐らくまた修正を指示されるであろう資料の訂正を始めた。

給料はいいものの、激務が当たり前のメガバンクに勤める柚は、毎日毎日数字を追い、女上司と戦い、顧客と戦う企業戦士だった。理不尽な要求や暴言に晒されながら、めげずに食らいつき続けてきた。そして、今、やっと課長代理にまで上がってきたのだ。必死に積み上げてきたキャリアは、「課長、また森田さんに虐められたんですか？」と数人の男女に囲まれている西村によって、今にも崩れ去ろうとしているが。

自分の見た目がいたって平凡であることが分かっていた柚は大学時代か

らしい就職先を目指し、勉学に励んだ。そのせいで、男性との交流もほとんどなく、お付き合いしたこともない。自分より年下の可愛い社員たちからは「行き遅れババア」と呼ばれていることは知っているが、それでいい。

自分には仕事がある。そしてなんだかんだ、大変な時は自分を頼ってくる憎めない後輩たちと大変ながらも楽しく仕事をしてきた。けれど、今年から課長として営業部にやってきた西村は、なぜか柚にだけ異常に当たりが強く、強かった。

—— 努力を重ねてきたこの仕事だけは自分を裏切らない。

そんな信条も、最早風前の灯だ。

いつの間にか悪者にされることへの多大なるストレスを解消しなかった。酒を飲むとすぐに酔っぱらってしまう柚は、よっぽど飲みたい時以外、自分に酒を禁じている。甘いものの爆食いも年をとるうちに、かなり体に脂肪

が付くようになってしまった。旅行に行く時間もない。毎日のように、西村から遠回りな嫌味を言われ、罵詈雑言を浴びせてくる顧客を担当させられ、柚の思考はすっかり歪んでしまっていた。

「私だって誰かに罵詈雑言を浴びせたい！」

—と思うぐらいには。

そこでとうとうSNSで「ドエム 犬」で検索をしてしまったのだ。

「うわぁ…気持ち悪い…」

検索をかけると、ほぼ性器が露出しているような写真を上げている男性ばかりだった。

「こ、こんなの相手にできる訳ない…」

諦めるしかないと柚がSNSを閉じかけた時。

「虐めてくれるご主人様募集。男です。もし俺の事を満足させてくれるなら

ずっとご主人様だけを愛します」

「…」

可愛いデフォルメされた黒い犬のアイコンとそのシンプルな内容が柚の目を引いた。

「…この人でいつか」

柚はその男にメッセージを送った。返事はすぐに帰って来た。

「ふう…はあ…ふう…、よし！」

久しぶりの二連休の夜。柚はお風呂に入ってご飯も食べ、寝る準備も終わらせた後、ベッドの上で正座してスマートフォンを見ていた。

「今、午後8時59分。…あと一分で、電話が来る…」

口から心臓が飛び出そうになる程に柚は緊張していた。あの後、男と何度



かメッセージをやり取りした。いきなり会うなんてことは流石に危険すぎると思う、「まずは電話で相性を確認したい」と申し出ると、あちら側も了承してくれたのだ。そして、今日が初めての男との電話の日だった。

午後9時になった瞬間、柚の電話の着信音が鳴り響く。ビクッと体を震わせた柚は、深呼吸を3回繰り返した後、意を決して電話に出た。

「も、もしもし！」

『…もしもし』

電話に出たのは、やけに小さい声でボソボソと喋る男だった。

（良かった…、デカくて怖そうな男の人が出たらどうしようと思った）

この声の感じだと、中肉中背の大人しい男性だろう。

柚はそう結論付け、少しでも声のトーンを上げて喋り始めた。

「あ、あの、黒犬さん…ですか？」

『…はい、黒犬…です。赤の…女王様で、間違いないですか？』

(っくくくく！恥ずかしいハンドルネームにしなけりゃ良かった!!)

後悔してももう遅い。ドエムなご主人様と言えば女王様、女王様と言えば、赤だろうと安易に付けてしまった名前を呼ばれて、柚は顔を真っ赤にする。

「そ、そうです。あ、赤の女王様で間違いないです!!」

恥ずかしくなった柚が早口で言い切ると、あちらは「ん…」と返事をした後黙り込んでしまった。

(ど、どうしよう、なんか気に入らなかった？もっと最初から女王様っぽく振舞わないとダメ!?で、でも黒犬さんが、どんな風に虐めて欲しいか分からないし…!っくくくくええい、分からないことは聞くしかない!)

生真面目な柚は、ビシッと背筋を正して「あ、あの！」と大きな声で相手に話しかけた。

『はい…？』

「そ、その！ど、どんな風に虐められたいというようなご要望はございますでしょうか！」

「要望…？」

相手の呆けたような声が聞こえてきて、柚は的外れなことを言ってしまったかと思い、さらに顔から火が出そうな程恥ずかしくなる。

「そ、その、いきなり酷いこと言われても、嫌かなって思っ！まずは相手の人となりを知って、それで、お互いに相性が良ければご主人様と犬になるというのがいいんじゃないかと思うんです！わ、私は33歳の会社員で、趣味は柔道です！好きな食べ物は甘いものなんですけど、最近食べ過ぎると太るようになってきたので、控えます！ご主人様になるのは初めてなので、少し緊張していますが、誠心誠意、心を込めてご主人様をさせていただきます

ければと思っております！どうぞよろしく願います！」

いつのまにか仕事の時と同じ口調になっているのにも気付かず、柚は相手に見えてもいないのに深く頭を下げた。

『ふ、ふふ…んふふ…』

すると、電話口の向こうから低い笑い声が聞こえてきた。

（わ、笑われてる…！だ、ダメだったー！）

しょんぼりと肩を落とした柚は「今日はお付き合いただき、誠にありがとうございました。誠にありがとうございました。あなた様に素晴らしいご主人様が見つかることをご祈念申し上げます…」とまるで、企業からのお祈りメールのような文言を呟いて電話を切ろうとする。

『あ、待って…。ふふ、いい。あなたがいいです』

「え…？」

『あなたがご主人様がいい。…末永くよろしく』

今までのボソボソ声とは違う、ちよつとだけ低く艶のある声に、柚は思わず「よろしくお願いします…」と返事をしてしまったのだった。

『…冷たくされる方が好き。ベタベタされるのは好きじゃないし、馴れ馴れしくもされたくない』

「あ、な、なるほど」

柚はスマホをスピーカーにして、黒犬に言われたことを律儀にノートにメモしていた。

（わ、私、ただちよつと相手を罵倒してストレス解消したかっただけなのに、なんでこんな真面目に相手のこと聞いているの!?)

心の中にそんな疑問が浮かぶものの、「ただただ愚直に真面目に諦めず」

をモットーに仕事をしてきた柚は、何事にも一生懸命に取り組んでしまうのだ。

「な、なるほど……。でしたら、黒犬さんのご希望をまとめさせていただきま  
すね。えっと……。とにかく冷たくあしらって欲しくて、べたべたされるのは  
嫌い、甘やかすのもやめて欲しいということですね？」

『……ご主人様のくせにすぐ擦り寄って来る奴らばかりで面白くない。……  
男のご主人様は生理的に無理だ』

「な、なるほど……。分かりました！ えっと、じゃあ早速ですがやってみまし  
ょうか！」

書いたメモを頭に叩き込み、柚が頬を叩いて気合を入れる。

『……よろしく』

「はいっ！ えっと……。よろしくって何？ 私の奴隷犬なんだから、『よろし

くお願いします』でしょ？この、バカ犬」

『っ！』

自分にセクハラしようとしてきた上司を問い詰める時に使った低い声で話してみると、黒犬は息を飲んだ。

「返事は？…私はちゃんとしつけされてる犬じゃないと飼うつもりはないけど？」

『…ご、ごめんなさい、ご主人様』

「ごめんなさい？あなた本当に馴けがなっていないのね？ごめんなさいじゃなくて、申し訳ございません、でしょ？」

琴子が吐息を含ませて言うのと、電話の向こうからガサガサと体勢を変えるような音がした。

（だ、大丈夫かな…？）

何かあったんじゃないかと心配になった柚が、声を掛けようとした時。

『申し訳ございませんでした、ご主人様。奴隷犬の分際で、失礼な口を聞き、大変反省しております。ご主人様のお声を寝ながら聞くという無礼もお許しく下さい。今、床に正座してご主人様の麗しいお声を拝聴しております』

「っ…！そ、それでいいよ」

（そ、そんなことまでしてくれてるの!?）

何とか冷たい声音で返したものの、柚は電話の向こうの男が冷たく硬い床に正座しているのを想像し、心配になってきた。

（ダメダメダメ！とにかく冷たくしてくれて言われてるんだから！）

ブンブンと首を横に振って思考をリセットした柚は、少し咳払いをして口を開く。

「まさか大事なご主人様の声を寝ながら聞いていたなんて…。そんな駄犬、



私には必要ないかも。もう電話、切ろうかな？」

『ま、待って！いい、嫌です、ご主人様。ごめんなさい、ごめんなさい！もう二度と、ご主人様に対して失礼なことはいたしませんから！』

（っ！なんか、すごくいい声が聞こえたような…）

先ほどまでのボソボソとした聞き取りづらい喋りではなく、低く深みのある声に、ドキッと柚の心が跳ねる。

（い、いや、ちょっと焦って変な声が出ただけだよな？）

柚はそう結論付け、「飼い犬の調教」に戻る。

「そう…。なら二度と私に失礼な態度を取らないで。もしそんなことをしたら、二度とあなたからの電話に出ないから」

『分かりました。…ご主人様の言う通りにします。だから、俺を…飼ってくれますか？』

「…あなたが私好みのいい犬になれた時に考えてあげる」

『必ず…あなた好みの奴隷犬に…なりますから！』

男の言葉を聞いて、柚はふーっつと長く息を吐き出した。

「あ、あの、こんな感じでどうですか？お、お気に召したでしょうか？そ、それとももう少し冷たい方がいいですか？すいません、ご主人様のなんたるかについて勉強してきてませんでした…。次はもっと冷たくて甘やかさないご主人様の解像度を上げてきますので！」

『…ふは』

また電話の向こうから男が笑う声が聞こえてくる。

「あ、あの…そんなに面白いですか…？」

拗ねた柚が低い声で問いかける。

『いや…、その、ごめんなさい。なんか…あなたみたい人…初めてで、可

愛いなあって』

『可愛い…？もうすぐ33歳になる社会人女性が可愛いって本気で言うてるんですか？』

『そういう個人情報…、あんまり軽率に言うの、やめた方がいいですよ…』

『あ、ご、ごめんなさい…』

男の少し低い声に、柚はびくりと体を震わせてしまう。

（低くて、唸ってるみたいな声…。ちよつと怖かった…）

『あ、あの…今日はこのへんにしときましょうか…？次までにもっとご主人様らしくなってきましたから』

『…分かりました。次は…こっちから連絡して…いいですか？』

男の言葉に、柚は先ほど男が出したのと同じぐらい低い声で返す。

『私から連絡するから、あなたからしてくるのはやめて。さようなら』

『あっ…!』

男の返事が返って来る前に通話を切った柚は、ボスツと顔面から枕に倒れ込んだ。

「うわぁ…やっちゃった…私…ご主人様に…なっちゃった!」

そう言っ枕を腕で抱え込み、柚はきゃーきゃーと叫びながらベッドの上で暴れまわったのだった。

それから男との交流は順調に進んだ。

男と二回目の通話をしたのは初回から2週間後。自分から連絡すると言っておきながら、仕事で西村と戦い続けていた柚は、やっと大きな案件を一つ終わらせて、終電に乗っていた時に久しぶりにSNSを開いた。すると、そこには一通のメッセージ通知が表示されていた。

「ん…?」

潰れそうになる目を何とか開いて、通知欄をタップする。

『すいません。我慢できなくて連絡してしまいました。ダメな犬でごめんなさい』

「っくくくく!」

疲れ切った体を何とか動かすために、力なく脈打っていた心臓の動きが一気に早くなった気がした。冷たかった手足がぽかぽかと温かくなってきて、なぜだか目まで潤んでくる。

「あ、へ、返事。返事しないと」

柚は急いで指を動かし、メッセージを書いて送った。

「連絡できなくてごめんなさい。最近忙しくて。メッセージ見たらなんかすごく嬉しかった」

そう送ってしまった後、柚は顔面蒼白になる。

（そ、そうだ！馴れ馴れしくされるの嫌だって言ってた！冷たくされたいって言ってたのに！）

こんな甘ったれたメッセージを送ってこられて、相手は怒っているかもしれない。柚は丁度到着した最寄り駅に駆け足で降りて、人のいないベンチに座って急いで電話を掛けた。黒犬はすぐに電話に出てくれた。

『もしもし？』

「あ、あの、ご、ごめんなさい！疲れてて、変なメッセージ送っちゃって、ほんとはもつとちゃんと冷たい返事を……！あ、そ、そうだ！あ、あなたね！待ったときなさいって言ったのにあんなメッセージおくってきでええ！……う

う、痛い、舌、嚙んだ…」

疲れが限界に達してシクシクと泣き始めた柚は、相手に申し訳なくてひたすらに謝り続ける。

「ごめ、ごめんなさい…ちゃんとするって約束したのに…。あ、あの、もつとちゃんとした…ご主人様がいいなら、別の人を…ぐすっ…探してもらってもいいですか…」

情けなく鼻水を啜りながら柚が話すのを、男は黙って聞いているようだった。あまりにも何も言わないので、柚が「あ、あの、聞いてますか？」と尋ねてしまう。

『…困ったなあ』

「え……」

電話の向こうから男のトロリと蕩けたような甘い声が聞こえてきて、柚

の意識が一気に覚醒する。

「あ、あの…」

『…あ、疲れてる時に申し訳ありませんでした、ご主人様。もう駄犬のこと、嫌になってしまいましたか?』

先ほどの碎けた口調が嘘のように、黒犬は丁寧な言葉遣いで話し始める。

(怒ってないのかな…?)

そんな思いから、柚が黙ったまましていると、男はさらに焦ったように言葉を重ねてくる。

『申し訳ありません、ご主人様。…どうしてもご主人様のお声が聞きたくて連絡してしまいました。もう二度とこんなことはいたしません。だから、どうか、俺のことを…捨てないで』

「っ!」



自信なさげなその声音に柚の心臓がまた高鳴ってしまふ。

「ゆ、許すよ…あつ、許します!」

へにゃへにゃの声音で言ってしまったことに気付き、また青ざめた柚が「ご、ごめんなさつ」と謝りかけるが「ご主人様」と低い声で止められる。

「今日は、お疲れなんですよね? だったら、今日は…頑張らなくてもいいです」

「あ…、で、でも…」

「…元気になったら、また俺の事、冷たく虐めてくれます…よね?」

「はい…、ごめんなさい」

「謝らなくていいです。…仕事、大変でした?」

「あ…、そ、そうですね…。ちよつと、上司と戦つてまして…」

柚が小さな声で言うのと、電話の向こうで「ぷつ」と吹き出す声が聞こえて

きた。

「あ、わ、笑いました？」

「いや…、なんか、猫が一生懸命爪立ててるの想像しちやつて…」

「…私のこと、猫みたいに可愛いと思ってるんですか？残念でした！ただの30代の平凡女ですよ！」

「はは…そう、でしたね。ふふ、戦ってるの？」

「あ、えっと…はい」

電話の向こうで、椅子に座った音が聞こえてくる。プレイしている時よりもリラックスした黒犬の声音に、柚はまた心臓がドキドキしてきてしまうのを感じていた。

「わ、私、結構激しいんです！それに、強いし！柔道ずっとやっていますから！」

「はは…そっか。強いのか。じゃあ、会った時に俺が生意気なこと言ったら、ご主人様にKOされちゃいます?」

「も、もちろん!男の人にだって負けませんから!」

「あっはは!そっか…そっかあ…。すごく…楽しみです」

「っ…で、でも!いい子にしないと、絶対会ってなんかあげませんから!」

「うん…分かりました。俺、いい子にします。…ご主人様の自慢の犬になれるように…いい子にする」

その声があまりにも艶っぽくて、柚はぽやんと熱に浮かされたように頬を赤く染めてへラッと笑ってしまう。

「うん…いい子に…して?」

「…うん、する。…いい子にするから…会いたい」

「……………あ!ちよ!ダ、ダメ!」

蜂蜜のように甘い雰囲気になつた柚は、なんとか我に返つて自分の両頬をべしんと挟み込んだ。

（ダメだ！いくら今日は頑張らなくてもいいって言われても、あまりにも甘すぎる！これじゃあ顧客満足度が下がっちゃう！）

一人でぐるぐると考え込んでいた柚は、「ご主人様？」と自分を呼ぶ声を聞いて慌てて返事をする。

「はい、います！あ、あの、私そろそろ家に帰るので…」

「…今どこにいるんですか？」

「ひえ！」

いきなり黒犬の声がぐっと低くなつて、柚はその恐ろしさに思わず小さく悲鳴を上げてしまった。

「あ、あの、今外で…それで…」

「…確かにちょっと風の音が聞こえる。夜なのに危ないですよ、すぐに帰ってください」

「は、はい。帰ります！」

「それと…これからは外で電話しないでください。電話するのは必ずお家に帰ってからでお願いします」

「は、はい！分かりました！」

自分がご主人様のはずなのに、なぜ諭されているんだろうか。そんなことを考えていると黒犬が「それじゃあ」と電話を切ろうとしたので、慌てて引き止める。

「あ、明日！明日は金曜日だし、ゆっくり電話できるから…電話、出なさいね？」

「…うん。絶対出る。じゃあ気を付けて。お休みなさい、ご主人様」

「おやすみ」

そういつて黒犬からの電話が切れる。

「はあ…なんか、なんか、楽しいかも！」

柚は心なしに肌艶も良くなった気がして、スキップしながら自宅に帰ったのだった。



「へえ、奴隷犬ねえ！」

「わ、わあ！マスター、声が大きいですよ！」

「あら、ごめんなさい」

目の前にいるお気に入りバーの女性マスター、朝倉（あさくら）が悪び

れる様子もなくへらへらと笑う。

「うふふ。前から変わってる子だなあとは思ってたけど、とうとう人間を飼いは始めるなんて。最高ね、あなた」

「…マスター、楽しんでますよね？」

「もっちゃん！」

ケラケラと笑いながら、朝倉が柚の前にジントニックを置いてくれる。

「それで？そのワンワンちゃんとは仲良くなったの？」

「前よりは…かなり…」

柚はジントニックをちびちびと飲みながら答える。黒犬と遠隔主従関係になってから、もう半年が過ぎた。今では毎週末どころか、時間が合えば平日でも電話して、冷たいご主人様とその奴隷犬のプレイを繰り返している。最初はぎこちなかった柚のご主人様っぷりも、生来の勉強好きが幸いし

て、なかなか様になってきたと自分では思っている。

「けど…最近…なんか…」

柚がぼやんとした顔をして俯いたのを見て、朝倉がニヤニヤと笑った。

「…あなた、自分の方が電話だけじゃ満足できなくなってきたんじゃないの？」

「へ!? い、いや、そんなことない! そんなことないです! 大満足です!」

「へえ、ならいいんじゃない? 遠隔調教、一生続けられ?」

「うう…」

柚が困った顔をして視線を落とす。それを見て、朝倉は柚がカウンターの上に置いているスマホを指差した。

「今日は金曜。明日は仕事なし。ならもうやることは一つでしょ!」

「え…?」



「呼び出しなさい！」

「……ええ！」

柚がその場に立ち上がる。

「む、無理ですよ！絶対無理！そ、それに黒犬がどこに住んでるかも分からないし！」

「それも聞いてみればいいじゃない！遠くに住んでるなら流石に無理って言うでしょ？でもまあ、一生飼いたい犬でいたいなら今日中にでも会いに来てって言いなさいよ、ご主人様？」

「うう…他人事だと思って！」

「他人事ですから♡ほら、私は忙しいんだから！さっさと決めなさいよ！」  
ほかの客からの注文を受けた朝倉がビシッと指を突きつけた後、去って行く。

「…」

柚は自分の目の前に置いたスマホをジーッとしばらく見つめた後、深い深呼吸をした。

（マスターの言う通り。もう…電話だけじゃ満足できなくなっちゃった）  
柚は先週末の黒犬とのプレイを思い出す。

「女に罵倒されて喜んでる変態犬の分際で、きゃんきゃん鳴かないで。まさか、ちっさい包茎ちんぽからだらしいカウパーだらだら零してるんじゃないでしょうね？」

『あう…♡して、ないです…、零して…ないです』

「じゃあなんでぐちゃぐちゃ汚い音がするの？勝手に包茎短ちんぽ扱ってるんですよ、この駄犬！」

『んぐう♡はあ…はあ…ごめんなさ…い、ご主人様…許して…もっと、もっと激しく、シコリたい…っ♡』

「ダメに決まってるでしょ…。全裸で正座して、なっさけなく短小ちんぽおツ立てながら、乳首でイクまで女みたいにヒンヒン喘ぎなさい！」

『んぐう♡っあ♡ ああ♡ご主人、さまあ♡ああ、ああ♡扱きたい…っ♡無理、乳首だけじゃ、無理ですう♡』

「…イクまで続けて。黒犬が無様に『イクイクウ♡』って言うまでずーっと聞いといてあげるから♡」

『ああああ♡んうう♡ おお♡ごしゅじん、しゃまあ♡ああ♡あああ、すご、ご主人様、ご主人様あ♡乳首…弄ってるとこ、見て、見て欲しいですう♡』

「…今聞いてやってるでしょ」

『ちが、違う♡見て、見て欲しい♡ご主人様あ♡あぐう♡俺が、乳首、弄って、無様に感じてるとこ、ご主人様に、いっぱい、見て、欲しい♡んぎい♡』

「っ！……ダ、ダメ…それは…」

柚の顔がじわじわと赤く染まっていき、息も荒くなっていく。

『んぐう♡乳首、きもぢい♡ あああ♡ご主人様あ♡ご主人様あ♡ちんこ、ちんこ、扱きたい♡扱きたい♡♡』

「ダメ、絶対ダメ。乳首だけでイけって言ったでしょ？ちんこ扱いたら、もう二度と、電話しないからっ！」

『い、いやだ！いやだいやだ！言うこと聞きます！ちゃんと、おおお♡いうごと、ぎぎますがらあ♡ ううう♡♡』

（すごく…気持ち良さそう…）

ただ言葉で指示を出しているだけなのに、柚のまんこがじわじわと濡れていく。乳首もピンツ♡と立ってしまい、寝る時はノーブラの柚のそれがパジャマとこすれ合い、柚は「あんっ♡」と小さい声で喘いでしまった。激しく声を出している黒犬には絶対に聞こえていないと思ったが、ピタリと黒犬の喘ぎ声が止まってしまった。

「あ…え？ど、どうか…した…」

「今…、喘いだ？」

「っ！」

プレイ中はスピーカーにしていたのだろう、遠くから聞こえていた黒犬の声が電話口のすぐそばから聞こえてきて、柚はビクリと体を震わせた。

「あ、喘いでない！喘いでない！」

『…嘘。俺、すげえ耳がいいんですよ、ご主人様…♡はあ…はあ…♡ねえ、

今、あんって言いきましたよね？ねえ、可愛い声であん！って！ねえ、ご主人様、い、今、あんって！』

「つゝゝゝゝ！うるさいうるさい！今日はもう終わり！バカ！駄犬！アホ！変態犬ゝゝゝ！」

『ああああ！ご、ご主人様！ご、ごめんなさつ！』

恥ずかしさのあまり、怒鳴ってしまった柚は通話が切れたスマホを「はーっ！はーっ！」と息を荒くして睨み詰める。スマホからはピコンピコンとたくさんのお知らせ音が鳴っていて、恐らく黒犬が怒涛の勢いで謝罪のメッセージを送ってきているのが分かったが、怒りが収まらない柚はスマホをペイッ！と遠くに放り投げてベッドに倒れ込んだ。

「最低最低最低！奴隷犬のくせに！ワンコのくせにいゝ！」

そう口で言いながらも、柚は足をもじもじとくねらせる。収まらないのは

怒りだけではなかったのだ。

先週のプレイを思い出し、顔を赤くしていた柚は、スマホの通知音で我に返る。

『本当に申し訳ありません、ご主人様。お返事が欲しいです。捨てないで』

「うう…」

スマホの画面に表示されたメッセージを見て、とうとう腹を決めた柚は黒犬に電話を掛けた。

『ご、ご主人様！お、俺！』

「…今どこにいるの？」

『え？い、今ですか？今は…』

ワンコールもしないうちに電話に出た黒犬に、また柚の心臓がきゅんき

ゆん♡ときめく。その甘酸っぱい気持ちを何とか振り払い、柚はできるだけ低い声で尋ねた。

『今は…ちよつと外にいます』

黒犬が返事をする。確かに、電話の向こうからゆったりとしたBGMと人の笑い声、グラスの音などが聞こえてくる。もしかしたら、飲みにも出ているのかもしれない。

「…バー・バレンティノ」

『え…？』

柚の言葉に、黒犬が呆けた声を出した。

「バー・バレンティノってどこにいるから、今すぐ来なさい」

『え？…え、ええ！いい、いいんですか？会っていい…んですか？』

「あ、会いたくないなら別に…」



『会う！あ、会う！会います！会いたい！ぜ、絶対行きます！お願い…します、待ってて。絶対、行くから』

黒犬のハスキーな、そして懇願するような声音に、柚は思わず「うん」と答えてしまう。

『す、すぐ行きます！お店、調べないと…っ、うるせえ！黙ってろ、お前らっ！』

「え…？」

突然、黒犬の怒鳴り声が聞こえて柚が目を丸くして固まる。その間に通話はブチッと切れてしまつて、その怒声が果たして本当に黒犬が発した言葉かどうか分からなくなつてしまった。柚は目の前にある酒を一気にのみ干すと、深呼吸をしてスマホを眺める。

（ほんとに…来るのかな）

そもそも、黒犬がどこにいるのかさえ分からない。必ず行くとは言っていたが、それこそ飛行機でないと来られない距離なら今日中に来るのは不可能だ。

「まあ：絶対行きますって言っただけで許してあげようかな」

時刻は午後十一時。そろそろ帰り支度を始めた方がいいかもしれない。

「その前にもう一杯飲もうかなあ」

なんだか嬉しくなってきた柚はメニュー表を手に取り、次の飲み物を考える。

「ねえ、ワンコ君、呼んだの？」

「え？電話はしたし来るとは言ってましたけど、絶対来ないと思いますよ。だってどこに住んでるかも分からないし、私、次の一杯飲んだら帰るつもりですから」

「あら、そうなの？残念。あなたのお気に入りワンコ君が見られるかと思つたのに。もしかしたらとんでもないイケメンかもしれないわよぉ？」

朝倉がニヤニヤと笑いながらおつまみを出してくれる。

「あはは！私のワンコはヒヨロガリの平凡犬ですよ！いつも私の言葉にビビってるし、何でも言うこと聞いちゃうし、声だってボソボソ小さいんですから！」

柚は最後の飲み物にサングリアを頼み、カウンターに頬杖を突く。

「きつと私と会ったらおどおどして何にも言えなくてきゅんきゅんって泣いちゃうんですよ。それで『ご主人様、ちゃんと来たい子な俺をよしよししてください♡』って言うに決まっています！」

「へえ、随分とご主人様が板について来たのね」

「ふふ！もう半年もしてますからね！」

「はいはい」

朝倉が飲み物を作ってくれているのをぼんやり眺めながら、柚はなんとなくにスマホを見ていた。するとピロンと通知音が鳴り、メッセージが表示される。

『あと5分で着くので、お願いですから待っててくださいね』

「え？5、5分!？」

柚が素っ頓狂な声を上げたのに気付き、朝倉が目を見開く。

「何よ、どうしたの？」

「い、いや！あの、わ、私のそのワンコが、あ、あと5分で店に来るらしくて！」

「え！そうなの！良かったじゃない！じゃあ結構近くに住んでたのね！」

「そうみたいです…」

勢いよく椅子から立ち上がった柚がまた椅子に座る。

（そっか…会えるんだ…黒犬に…）

先週のプレイを思い出すと、なんだか下半身がムズムズしてしまい、柚はスリスリと足を擦りあわせる。

「確か、ボソボソ話す自信なさげなワンコ君だったわよね？やだ、楽しみたい！ちょっと揶揄ってあげたら泣いちゃう？」

「私のワンコなんだから虐めないでください！」

「はいはい！大丈夫です！私はヒョロガリ君には興味ありませんから！私はデッカくてムキムキの褐色最強格闘家のボルツ君に夢中なんだからあゝ♡」

「はいはい…」

自分のスマホをギャルソンエプロンの中から取り出し、画面を見てキャ

アキヤアと悶えている朝倉を横目に、柚はそわそわしながら店の入り口に視線を向ける。

（黒犬の言うことがほんとなら、もう来てもおかしくない…）

その時、扉が開きドアベルが店内に鳴り響く。

「あ…」

入って来たのは、背が高いが少し猫背で、眼鏡をかけた痩せ型のサラリーマンだった。男はくたびれた顔をして、胸に鞆を抱えている。

（あの人が…私の黒犬…？）

男はキョロキョロしながら店の中を柚の方へ進んでくる。

（ど、どうしよう。なんて声掛けよう。黒犬さんですか？っていきなり聞いてもいいの？周りの人に変に思われる？で、でも本名なんて知らないし…）  
そんなことをグルグル考えているうちに、男は柚のすぐ傍まで近づいて

きてしまっていた。柚は視線を上げて男の顔を見る。男もまた柚の方に視線を向けてきた。

（あ…違う）

——これは私の犬じゃない。

男の疲れ切った顔を柚はぼんやりと眺める。遠くで、ドアベルの音が聞こえた気がしたが、柚は気付かない。

（違う、この人じゃない。瞳に…熱がない。私への…大好きなご主人様への…愛が…感じられない）

男はへラっと笑ってペコリと会釈した後、さらに奥のカウンター席に座る男たちに合流していった。どうやら自分の勘違いだったらしいと気付いた柚は、恥ずかしさに頬を少しだけ赤く染めながら俯く。膝の上に置いたスマホをタップし、もう一度メッセージを確認するが、先ほどのメッセージを

最後に連絡は来ていない。柚は苦笑して朝倉に「お会計お願いします」と告げ、鞆から財布を取り出そうとした。

「ご主人様……ですよね？」

低い落ち着いた声が入る。

「あ……え？」

柚がゆっくりと視線を上に向けた。

「そうです……俺が……あなたの奴隷犬です」

男、黒犬がそれはそれは嬉しそうに笑っていた。

「え、あ、あの、ええ！」

柚は何度も立ったり座ったりを繰り返して、自分の横に立っている黒犬を見ていた。



（え…？大きくない？筋肉すごいし…！あ、あと、顔！なんで、こんなカッコいいの!?彫りも深くてハーフっぽいし！なんか柄悪そうだし！え、え、え、え、なんで!?自信なさげで。ヒョロくて、ガリガリの…！）

「わ、私の黒犬はあ…？」

大混乱に陥っていた柚は、思わずそんな言葉を口から漏らして涙目になってしまった。黒犬はコテンと首を傾げて、へにやりと嬉しそうに笑う。

「俺です、ご主人様。俺があなたの黒犬ですよ？」

かなり上を見ないと合わない視線と、黒のタンクトップから見える褐色の肌に盛り上がった筋肉。

「ちが…違うよ！違う違う！」

「え…？ど、どうしたんですか、ご主人様」

黒犬が困ったような顔をして、柚に手を伸ばしてくる。柚はキッと男を睨

みつけて、その手を叩き落した。

「違う！私の黒犬は！もっとひよろひよろしてて、可愛いの！あ、あなたじゃない！」

「え…、な、なんでそんなこと言うんですか？も、もしかして5分遅刻してきたこと怒ってるんですか？も、申し訳ありません！タクシーに乗ろうと思ったんですけど、渋滞してて走った方が速いかと思って！」

「し、知らない！そんな事情知らない！私の黒犬、どこにやったの！返して！」

「ご主人様…、俺ですよ。俺があなたの黒犬です！」

「違うう…」

「なんでえ…」

黒犬は涙目になってがっくりと肩を落とし俯く。

「俺：やっと、ご主人様に会えると思って：やっと、俺のこと見てもらえる  
と思つてたのに……。どうしてですかあ、ご主人様あ……」

男は血が出るんじゃないかというくらいに拳を握りしめていて、体は小  
刻みに震えていた。

「あ……」

柚は無意識の内に椅子から降りて、男の傍に寄ると、下からその端正な顔  
を見上げる。

「綺麗……」

その青い瞳にうつすらと涙の膜が張り、キラキラと輝いているのを見て、  
柚は思わず手を伸ばしてしまう。

「っう……ご主人様あ……」

黒犬は唇を噛みしめて、柚の手にスリスリと顔をすり寄せてくる。

「ご主人様…ご主人様…、お願い、捨てないでえ」

（あ、私のだ）

先ほどのサラリーマンとは真逆の感覚に、柚はもう片方の手も伸ばして、黒犬の両頬をもちもちと揉んでやった。

「ご主人様…？」

「ごめんなさい。私のだった。ちょっと分かんなくなっちゃってた」

「つゝつゝご主人様あ！」

「むぐう！」

あるはずのない耳がピンツと立ち上がり、尻尾がぶんぶんと振られているように見えた柚は黒犬のあまりの力の強さに苦しくなり、腕の中でもがく。

「ぐ、ぐるじい！こ、こら！落ち着きなさい！」

「ご主人様…うう…ご主人様あ♡」

「っ、待て！」

「っわん！」

柚の言葉にビクンと反応した黒犬がバツと両手を上にあげて抱きしめるのをやめる。

「全く…！」

「申し訳ありません、ご主人様。でも、ご主人様に会えて嬉しくて…！」

黒犬がきゅんきゅんと子犬が泣いているような顔で腰をかがめて柚の両手をぎゅうつと握る。

「ご主人様…早く、二人きりになりたいです…！お願いします！俺、ちゃんとかご主人様の言いつけ通りに迎えに来ました！だから…っ！」

「わ、分かったからちよつと落ち着いて！マスター、お会計を…！」



「ちょっと！歩きづらい！」

「ご主人様…ご主人様あ♡」

「こら、スリスリしないで！っもう！言うこと聞けないんだったら、帰るかー！」

「っ！い、嫌だ！嫌です！ダメです！言うこと聞きます！」

柚を後ろから抱きしめ、スリスリ♡と頭に顔を擦り付けていた黒犬がすぐに離れる。柚はクルリと振り返って、自分の腰に手を当てて、自分の犬を見上げた。説教してやろうと思ったのだ。

「ご主人様あ…」

「っ！」

（だ、ダメだ。言えない。こ、こんな強面筋肉ムキムキ男に、説教なんてで

きない！)

今まで普通のサラリーマンだろうと思い込んでいた黒犬が、恐らく上位数%台のとんでもない顔整いの雄だということが判明し、柚は思いつきりビビっていた。

「あ、あの…その…あんまり、近付かれると、ちょっと、あの…」

柚は黒犬から視線を逸らしてぼそぼそと話す。俯いた柚の視線の先には、黒犬の大きな靴が見えて、自分の小さなヒールのサイズと比べてまた勝手に恐怖を感じてしまった。

「あ、あの…その、えっと、こ、こんな夜に呼び出して、も、申し訳ありません…」

「い、嫌だ！やだやだ！嫌です！何ですか、その口調！なんでそんな他人みたいな言い方するんですか！」



「きゃあ！」

突然腰とお尻に手を回され、高く抱き上げられた柚は悲鳴を上げて、下にある黒犬の顔に視線を向ける。その顔は泣きそうな程に瞳を潤ませていた。

「ちょ、降ろして……！」

「嫌です！絶対降ろささないです！いつもみたいにもっと冷たくしてください！バカ犬って言ってください！言いうことを聞かない駄犬にちゃんとお仕置きしてください！」

「こ、こら！外でそんなこと言ったらダメ！」

柚が慌てて周囲を見渡すと、大男に突然抱き上げられた柚はもちろん注目の的になっていた。それに気付いていないのか、黒犬はさらに言い募ろうと口を開こうとする。

「ッダメ！」

「んむう！」

柚は急いで両手を伸ばすと、黒犬の口をむぎゅうつと塞いだ。黒犬は目を見開き、固まってしまっている。それをいいことに、柚は黒犬の耳に口元を寄せて囁いた。

「こんなところで、変なこと言わないで」

「で、でもお…」

黒犬がウルウルとした瞳で柚を見つめてくる。その子犬顔がハートを撃ち抜いてきて、柚は思わず黒犬の耳を指でスリスリ♡と擦ってしまった。

「あうッ♡」

黒犬がぎゅつと目を閉じ、小さく体を震わせて低い喘ぎ声を上げる。

「ご、ご主人様…」

「…我慢、できる、でしょ？」

「ふっ…！♡ う… あッ♡ぐっ…んぐう♡」

スリスリ♡と耳朶を愛撫しながら、柚が優しく囁き続けると、黒犬の瞳がドロォ♡と蕩け、吐息が「はッ♡はッ♡」と荒くなっていく。

（可愛い…。私の犬、こんなに可愛かったの…？）

先ほどまでの恐怖はとくに吹っ飛んでいて、今は目の前の可愛く喘ぐ飼犬のことしか考えられない。柚はもう一度耳元の唇を寄せて「降ろしなさい」と命令した。

「い、嫌です！」

また他人行儀な対応をされるのかと思い、首を横に振って抵抗する黒犬に、柚が優しく笑いかける。

「…二人つきりになれる所に行きたいの。ちゃんと言うこと聞かないとお仕置きするから」

「っう！」

ないはずの犬耳と尻尾がピンツと立ったように見えて、柚がクスクスと笑っていると、黒犬がゆつくりと柚の体を地面に降ろした。そして右手で柚の手をぎゅうつと握ってくる。

「ご主人様に相応しい場所にお連れします」

「うん、いい子だね」

「うう~~~~♡」

柚の艶のある声に、黒犬の口元がだらしなく歪んだ。

「こ、ここなの？ほんとに？」

「はい！行きましょう、ご主人様！」

「ま、待って！待ちなさい、ちよつとこっち！」

柚は超高級ホテルにニコニコ顔で入ろうとしている黒犬の手を引っ張り、人目に付かない建物の影へと引っ張った。

「こ、こんなところに泊まれる訳ないでしょ!」

「…?なんでですか?あ!もしかして気に入らなかったですか?申し訳ありません、ご主人様!すぐに別のホテルを手配して!」

ポケットからスマホを取り出し、どこかに連絡しようとする黒犬の手を柚は慌てて握り込む。

「あ♡ご主人様の手…♡」

「ち、違う!そういうことじゃなくて!こ、こんな高いホテル、あなたお金出せるの!」

「え?高いホテル?」

やっぱりホテルの宿泊料を知らなかったんだと柚が大きなため息を吐く。

「全く、しょうがない。あのね？ここはお金持ちとか芸能人御用達の高級ホテルなの。私たちみたいな一般人が入ったら、それだけで笑われちゃうの」

「んっ…♡」

柚はクスクスと笑いながら、高い背を丸めて自分の言葉をしっかりと聞き取ろうとする黒犬の乱れた前髪を整えてやる。

「ふふ。…ご主人様の前だからいいところ見せようと思ったの？そんなことしなくてもあなたは私の可愛い飼い犬だから大丈夫だよ。一泊ぐらいなら私も払えるけど、もっと身の丈にあった場所に行こう？」

「はい…ご主人様の言うこと、全部聞きます。俺…いい子だから」

「うん…そう…だね」

柚が黒犬の頬を親指でスリスリと撫でてやると、黒犬が気持ち良さそうに目を細める。

「それじゃあ行きましようか」

柚が建物の陰から出ようとするが、それを黒犬が引き止める。

「それじゃあちよつとだけ荷物取ってきてもいいですか？」

「荷物？ いいけど、どこにあるの？」

「ここです」

「ここ？」

柚がコテンと首を傾げると、黒犬がにっこりと笑って自分たちを隠してくれている大きなホテルを指差した。

「お帰りなさいませ、神楽様」

「荷物を取りに来ただけだ。すぐ出る」

「かしこまりました」

「…」

柚の手を引いて、ホテルの中を闊歩する黒犬に、支配人と思わしきスーツの男が声を掛けて、ペコリと頭を下げて去っていく。柚がぽかんと口を開けてそんな二人の様子を見てみると、黒犬はニコニコと笑って「ご主人様、こっちです!」と柚の手を引き、エレベーターホールへと案内した。

「ご主人様と一緒に出掛けるんだったら、こんな格好じゃ恥ずかしいですから!ちゃんとしたスーツ着ていきたいんです」

「ス、スーツ? い、いいよ。別にその恰好で…」

「嫌です。…ご主人様に自慢の飼い犬って思ってもらいたいんです」

「…」

唇を尖らせる黒犬の端正な顔立ちを、柚は下から見上げる。

(ご主人様って、こんなに無条件に愛される存在なんだ)



特に理由があって黒犬を飼う犬に選んだ訳ではない。ただ何とかないなと思っただけだ。柚の視線に気付いた黒犬が視線をこちらに向けてきて、ニコニコと笑う。柚はふいっと視線を逸らし、自分の足元を見つめた。

(…本当にこんな人のご主人様が私でいいんだろうか)

どう考えても釣り合わない。黒犬の本名も仕事も何も知らないが、お互いの容姿だけで釣り合っていないことが分かる。

「ご主人様、エレベーターが来ました！」

「うん…」

黒犬に手を引かれて、柚はエレベーターに乗り込む。

(…黒犬が手を引くべき人は多分私じゃない)

半年間も調教を重ね、とうとう実際に会うことができた黒犬。皮肉なことに、実際に顔を合わせたことで、柚は黒犬との間に距離があることを痛感す

ることになってしまった。

「ここ…高い部屋じゃないの？」

「え？そんなことないですよ。ご主人様、お飲み物はコーヒーでいいですか？俺、ちよつと着替えてくるので少し待っていていただけるとありがたいです」

「…うん、分かった。あ、ねえ、スマホ貸して」

「スマホですか…？」

黒犬が怪訝そうな顔で首を傾げる。

「そう。あなたが私以外のご主人様を作って尻尾を振っていないか確かめたいの」

「そ、そんなこと！俺は絶対してないです！俺はご主人様だけです！」

「ならいいでしょう？」

「分かりました！いくらでも見ていただいて大丈夫ですから！」

「パスワードは？」

「ご主人様の誕生日です」

「…そう」

黒犬はキリッとした顔で柚にスマホを渡し、コーヒーをガラステーブルに置くと「すぐに着替えてきます！」と奥の部屋に駆け足で去って行った。ボタンと扉が閉まった音がしたところで、柚は急いで黒犬のスマホのロックを解除した。自分の連絡先を削除するためだ。そして黒犬がいないうちにこの部屋を出て、二度と会わないようにしようと思っていた。

「あ…、これ」

しかし、黒犬のスマホの壁紙を見て、柚はそのまま固まってしまう。

「これ…、この前私がちよつとだけ話したやつ…」

壁紙は不細工な顔をした猫のガチャガチャのフィギュアが何個も並んでいる画像だった。

「…」

柚は勝手に黒犬のスマホのあらゆるページを見て回る。

ブラウザには、柚が会話の中でほんの少し話題にしたお菓子や映画、飲み物や本について検索したページや「ご主人様に愛されるには」というブログのページが残されている。

写真は柚が好きだと漏らした花や犬の画像でいっぱいだった。

メモアプリには「ご主人様へのプレゼント」というタイトルのものに、たくさんの品物が羅列されている。

「あ…」

じわじわと心が温まる。

「私の…私の黒犬…」

柚はぎゅうつと黒犬のスマホを握りしめる。

黒犬の容姿と、このホテルに宿泊しているということで、彼が平凡な男ではないということはとくに分かっていた。見た目も性格も平凡な自分に、彼のご主人様が務まるはずがないという不安はいまだ消えない。

けれど、やれるところまでやってみようかと思ってしまった。

「…ふふ、私は諦めが悪いから」

「酷いなあ…」

「ひゃあ！」

後ろからふわりと抱きしめられ、柚は小さく悲鳴を上げた。自分の肩に額を乗せて、「はぁー」と大きなため息を吐いたのは着替えにいったはずの黒

犬だった。

「どうした…の？」

「…ご主人様、俺から逃げるつもりですよね？」

「っ！」

凶星を突かれて、柚の体がビクリと震える。黒犬は顔を伏せたまま、クスクスと笑っていた。

「…やっぱり。やけに急いで俺のスマホを弄ってるなあって思ってたんですよ。…ご主人様の連絡先でも消しました？」

「あっ…」

黒犬の大きな手が柚の手を覆い、するりとスマホを引き抜く。

「ダメ…ダメですよ、ご主人様」

「あ、ちょ、待って！」

黒犬はスーツに着替える途中だったようで、はだけたシャツと腰の辺りで適当に履いたスラックスが艶めかしい。柚が顔を赤くしている間に、黒犬は柚の手を引き、ベッドルームの扉を足で蹴り開けた。

「きゃあ！」

黒犬は無言のまま、ベッドの縁に座ると、立ったままの柚の手をぎゅっと握ってくる。

「…なんでですか？俺に会ったら嫌になったんですか？」

「あ、あの…」

「デカくてゴツくて可愛くないから？顔が怖い？体デカいのが怖い？…バ―で目を合わせてたあのヒョロい男みたいなのが良かったんですか？」

「ちがつ！」

柚が否定しようとするが、その前に、黒犬がぶんぶんと首を横に振る。

「嫌だ：嫌だ嫌だ嫌だ！俺のご主人様なのに！なんでほかの奴なんか見るんですか！なんで俺を捨てようとするんですか！ご、ご主人様が望むなら、俺、痩せます。筋肉なんて全部落としてあの男みたいにヒョロヒョロになります。小さいのが好きなら縮こまってます。それでもだめなら足を切って……！」